

おわりに

今、国の教育政策が揺らいでいる。それは単純に文部科学省が「学力低下」批判などの世論に押されてぶれているという話ではない。そもそも教育政策に関与するアクターが、以前であれば文部省と自民党（文教族）、それに抵抗する野党及び日教組といった図式であったが、現在は文部科学省ばかりでなく、総務省や経済産業省等の他省庁、そして官邸サイドも教育政策に大きな影響力を発揮するようになってきている。かつて宗像誠也は「教育政策とは権力に支持された教育理念」と定義したわけだが、その権力が以上のように分散されている現状では、それぞれの立場の違いによる主張は質的に吟味され捨選択されるのではなく、政治力学によってまさにパワーゲームとして決定されているといえよう。

このことは、地方自治体レベルの教育政策についても同様である。最近、元気な首長が教育改革に自ら乗り出したりして、教育委員会（事務局）ばかりでなく首町部局がリードしたり、専門家や住民を代表しているという「正統性」から審議会委員や議会の議員さんたちの声に引っ張られたりしがちである。

そうした中で、個人の意見はたとえ「主義主張」はあっても必ずしも固定的ではなく、得てして時代を反映したり、場の空気を掴み取りながら議論がなされる。学力かゆとりか、教師の指導性か子どもの主体性か、等々、教育論議は絶対的な白黒はつけがたく、結果、4対6とか51対49などの僅差で方向性が決められていきがちである。そこでの議論はじゃんけんゲームのようにグーを出しても相手の出方次第で勝つこともあれば負けることもあり、いかに他のアクターの出方を予想し対応するかが重要となる（ゲーム理論）。

そこで今学期の「教育政策学演習」では競技ディベートの手法を採用し、賛否両論ある今日的な教育政策課題を取り上げ、これを賛成側・反対側に分かれて論点を整理しながら議論することにした。受講生19名を機械的に4、5人の4グループ（A～Dグループ）に分け、学年の壁を越えたグループワークを中心にすすめることにした。

まずは、高校生ディベート甲子園のビデオを視聴し、競技ディベートのルールを学んだ。参考資料として、面識はないが、本学にも社会科教育法の非常勤でお越しいただいている佐賀大学文化教育学部の佐長健司教授作成のディベートマニュアルを参考させていただき、ディベートフローシートも本報告書の「折り込み」のように活用させていただいた。

「二学期制導入の是非」をはじめとする6つのテーマについて、賛成側・反対側、対戦相手を入れ替えながら計3回の「大会本番」で4チームが1試合ずつ（各回2試合）行うこととし、対戦のない2チームが司会進行1名、計時1名、記録2名、審査員（残り全員）を担当した。感想にもあるが予備知識のないテーマを審査することの困難さは課題として残ったものの、本番の90分（+ α 、毎回審査に手間取り時間オーバー）は私を除く全員が頭をフル回転しつづける過酷な時間であった。そのあたりも一部抜粋したミニレポートの感想の中にみられるはずである。

大会本番の前週は各グループごとの「作戦会議」の時間として確保したが、それ以前に各自が図書館やインターネットを活用して情報収集し、ある程度テーマについての理解と議論の方向性を決めるまでしておかなければならず、かなりの下準備を必要としている。学年も系も異なるため、正規の時間以外にはなかなか打ち合わせのための時間がとれないことも課題であったようである。

しかしながら、授業者の期待以上の準備をしており、1回のビデオ視聴のみで競技ディベートの息づかいも何となく掴めたようで、第1回めの試合からすでにそれらしい雰囲気を保ちながら議論をすすめることができたように思う。(全対戦は8ミリVTRに保存)。

3回目の試合を高大連携事業に絡めたことも俄然モチベーションが高まったのではないだろうか。外部者、しかも高校生に「みられている」という緊張感は事前の準備を含め、議論の質をあげることに貢献したように思われる。(高校生の感想も掲載)

授業者の「仕組んだ」通り、この3回の試合をやりっ放しにしてしまわず、将棋や囲碁の対局の後に振り返るようにリフレクションする方向に話はすすんだ。一部抵抗勢力?の懸念通り、それは過酷な作業を強いる活動となった。結果はともあれ終わってほっと一息、切れてしまった緊張の糸を結び直す作業は、その後、クリスマスイブの日も、正月明けもそしてセンター入試で休みのはずの日まで続いた。

大変な作業ながら、こうして文字に起こしてみると、ヒアリングでは誤った漢字変換で議論をすすめていたことや当日はなぜそのように反駁されたのか理解できなかったことが改めてわかったという声が聞かれた。

そしてようやく完成したのがこの小冊子である。私の大学教員としてのキャリアはまだ10年程度と浅いが、しかしこれほどまでに「楽」な演習は初めてであった。事前・事中・事後そのほとんどが受講生自身の手によるものであり、学生主体の授業経営であったことは特筆すべきであろう。また、箱崎に進級したばかりの学部2年生から、春には先生となる大学院生の圓入君まで、本演習を通じて新しい出会いと関係構築ができたのであれば、副次効果としては幸いである。受講生諸氏には加重負担を強いたストレスの溜まる演習であったようだが、私はもとより皆さんにとっても「楽」しい演習であったと願っている。

2005年2月15日

元 兼 正 浩